

るに、延寶二年の眞長寺由來書に、三代以前の住持、微妙公御代關東より當御地へ罷越、中村刑部を以申上、河原町近所にて屋敷拜領寺建立之處、元和八年に稻荷御宮御建立、別當被仰付。稻荷御宮御建立御奉行、瀧與右衛門・福田平左衛門に而御座候。と載せたるのみにて、其の以前味噌藏町稻荷橋邊へ假に遷座ありし事は所見なし。又淺野川稻荷社の事は、加賀古蹟考に、石川郡久安村に富樫泰高居館せし頃、稻荷明神を勧請す。此稻荷をば金澤へ移し、今の味噌藏町稻荷橋の邊に社を造營す。然るに元和二年再び淺野川縁へ移轉す。今の稻荷天道寺是也。と見ゆ、天道寺記には、金澤城地に本源寺を建立せし頃、稻荷橋の邊へ遷宮し、慶安四年八月淺野川今の地へ再轉す。故に久安村の稻荷神社は本社なるに依りて、昔より天道寺兼勤す。とありて、稻荷橋の舊社地は、舊藩士岩田氏の第地なる由傳承す。右傳説に據れば、稻荷屋敷にありし稻荷を、假に味噌藏町へ移したりといふ説は、淺野川の稻荷と混同せしものにて、過聞なる事いぢるし。

○西、丸

此の曲輪は玉泉院丸をいへり。今尾山神社の後に當る曲輪にて、本丸より西隅なるを以て、昔は西丸と呼べり。三壺記に、文祿元年金城石垣等經營の條に、此の時二三丸、西丸北丸まで人持衆の居屋敷に渡り、各屋形を美々敷建て並べけり。と見ゆ。又是より先きにも、既に此の地に大身の諸士居住せしにや。同記に、天正十九年十一月利家卿金澤御下向、其時分西丸に村井豐後の居屋敷有りて御成を願ひ、則被爲成。とあり。陳善録にも、村井豐後西丸に居住し、城代を勤め居たるよし記載す。又慶長五年大聖寺城攻終へて後、長九郎左衛門連龍へ西丸にて宅地を賜はり家作せし由、信連記可觀小説等に見ゆ。此の外にも西丸の稱號彼は見たり。

○村井豐後守長頼舊第

其の遺跡今の玉泉院丸也。有澤武貞の金澤細見圖譜に、三丸異風稽古所の地は、村井豐後守平長頼の屋敷にて、天正十二年壬申年末森役の砌も、早く一左右を聞き届けられたる咄あり。後は今の權現堂の地に村井氏居住せらる。といへり。按ずるに、右の傳説に據れば、元祖長頼は初め三丸

なる石川門の傍の異風稽古所ありし地に居住し、後西丸へ移轉し、其の子出雲長次の時、北丸權現堂の地へ再轉せしと聞ゆ。慶長の金澤城古圖に、即ち權現堂の地に村井出雲と記載す。三州志來因概覽附録に、元和六年本丸火災の時、北丸に村井又兵衛の第有りて、春香院殿の居室ありしと載せたる又兵衛は、出雲長次が事なるべし。

○村井第利家卿光臨

三州志藝藝餘考に云ふ。天正十九年辛卯三月、公休暇を賜ひて尾山へ還城。八月六日村井豐後守第へ光臨。其の第金城西丸にあり。此の時茶室にて、豐後自ら濃茶を獻す。國祖も慰に自ら抹茶を點せらると。又村井長明の陳善録に云ふ。大納言様上方より御下向被成時、西丸に村井豐後城代に罷在故に、八月六日村井豐後所へ可被爲成旨に付、豐後難有奉存、御成を仕候。一段御機嫌能、豐後手前にて御茶を上げたり。利家卿も御慰に御手前可被成由にて、徳山五兵衛・寺西宗興・篠原出羽など謹みてあり。于時二間次の間にて、神谷信濃と江守平左衛門とされ事のうへからかひ出し、既に平左衛門思ひ切りたる躰なるを、岡田長右衛

門・種善坊中へ入り取りさへ、言葉ひきく成りたり。利家卿、はやうす茶に成つた、鉢菓子を出し候へと仰せらる。それをしほにして、豐後御前を罷立ち、兩人へことの外つよく異見をなしたり。平左衛門は豐後の寄子、信濃は豐後の是非に引立てくれ候へと常々申す仁ゆゑ、兩方共しづまり迷惑しけり。其夜利家卿御寢被爲成、殊の外信濃を御よまひごと被成候。とあり。三壺記には、天正十九年十一月

中旬に、利家卿金澤へ下向被成。其時分西丸に村井豐後在之。御成を仕、御機嫌能被爲成。御膳相濟、豐後手前にて御茶を上げ奉る。茶の具御覽被成刻、勝手に神谷信濃と江守平左衛門と申分いたしけり云々。此時豐後に菓子・薄茶を乞はせらるゝ事、勝手へ立たせて兩人を鎮めさせんとの御趣意、忝き御志やと後に人申しあへり。其年も暮れて正月にも成りければ云々。とて、年頭御禮の事を載せたり。されば天正十九年の暮頃なるよしに聞ゆれど、陳善録に正しく八月六日と載せれば、三壺記の説は全く誤りなることいぢるし。吉田軌中の前田四代自記に、天正十九年冬十一月公加州に歸城と記載せしも、是三壺記に據りた